

史跡探訪レポート

市内―観海寺・堀田地区

研 修 部

本年度の市内史跡探訪は、別府八湯語り部の会・ボランテイアガイド部会の観海寺ウォーク（会長佐々木省二氏）の世話役、旅亭松葉屋の吉武伸剛氏及び観海寺在住の佐藤哲朗氏、別府史談会理事の矢島嗣久氏等の発案案内により、七月三日（日）のコース下見から始まった。

その見学コースは、当日の「観海寺ウォーク配布資料」（矢島嗣久氏作成）に沿って振り返ります。

①みゆき坂展望公園の説明

石垣原合戦、慶長五（一六〇〇）年九月十三日、関ヶ原合戦の二日前。この地は吉弘嘉兵衛統幸の陣所跡で、西軍方・大友義統の右翼陣である。

南立石本町には、大友義統本陣跡がある。傍の天満天神宮の天井絵には石垣原合戦の「吉弘統幸公」が描かれ

ている。

堀田の高台には左翼の宗像掃部の陣所跡がある。

皇太子行啓記念碑《大正元（一九一二年建立）、明治四十（一九〇七）年十一月、大正天皇の皇太子時代（二十二歳）の行啓を記念して五年後に建立している。

②観海寺橋 高さ約二五メートル。

メガネ橋の造営費二万五千円を県に寄付。大正九（一九二〇）年に工事開始。大正十一（一九二二）年一〇月に完成。橋の長さ三三・五メートル。幅五・五メートル。現在の観海寺大橋は、メガネ橋ではない。実用的ではあるが、面影も観光的ではなくなっている。

③昭和天皇行幸記念碑

ホテル白雲山荘跡地に建立されている。植樹祭行幸記念碑である。

④ホテル白雲山荘跡地

村上勇衆議院議員（郵政大臣・建設大臣）の弟、村上春蔵参議院議員がホテル白雲山荘を経営。昭和三十七（一九六二）年五月大火。

現在は平成十七（二〇〇五）年二月に開設された高齢者養護施設の「ゆうゆうの郷白雲山荘」になっている。

⑤ 両築別邸

足湯。以前は「ホテル別府観海荘」であった。

⑥ 古い石段 湯治場の雰囲気の石段を登る。

⑦ 観海禅寺

憩翼碑 特攻隊の碑

式子内親王の墓（後白河法皇の第三皇女）

「玉の緒よたえねば絶えね ながらへば 忍ぶること
もよわりもぞする」

二条義実（よしざね）の墓

幕末の安政五（一八五八）年六月、かつて観海寺に

いた二条義実が長州の萩で暗殺されたという。

観海禅寺に関する大友宗麟の古文書が発見されている。

⑧ 式子内親王 悲恋の伝説

⑨ 金比羅神社

観海禅寺の前を通り、細い参道の先に鎮座している。

⑩ 薬師堂

薬師堂記念碑 昭和八（一九三三）年建立。設計者

別府市技師 池田三比古

⑪ 観海寺の大火

昭和六（一九三一）年一〇月、十九戸全焼、浴客一人

焼死。

⑫ 旅亭松葉屋にてコーヒータム

⑬ 感想等。解散。

以上のコースの下見の後、少し見学地を再検討して、堀田
まで含んだコースを見学コースとすることになった。次に本
番の報告をします。

夏期市内史跡探訪「観海寺・堀田」（平成二三年八月二八日
（日）・八時四十五分受付〜十二時）

まず、堀田本村（南立石本町）の天満宮神社に集合し、会
長挨拶、現地の方々の紹介、コースの概略説明をして見学に
入った。

天満宮神社の天井絵で石垣原合戦を想い、道路工事の為、
移設された宗像掃部記念碑を見学した。

次いで、鶴見岳一気登山道の一部利用して少し歩き、高速
道路を越えて見通しの良い堀田の高台に着き、北白川宮成久
親王殿下覽古碑、征路軍人記念塔・田屋不動（田屋地藏）・
庚申塚（塔）、少し離れて井上邸鏝絵の見学をした。

本村に戻り、大友本陣跡・海雲寺を見学し、観海寺地区に

下りた。広大な敷地の杉の井地熱発電所、一部古い石の橋脚の残る観海寺橋、昭和の両陛下植樹祭記念碑を見学した。坂道を登り復興泉・観海寺温泉、薬師堂を見学の後、急な石垣を登り観海禅寺へと向かった。ここでは古文書、式子内親王墓所、特別攻撃隊憩翼碑、日露戦争戦勝記念碑を見学した。

次いで、旅亭松葉屋にて休憩と昼食をとった。おにぎりとそうめん及びアイスコーヒーで一息つき、この時最初に見学した天満宮神社の天井絵のスライドで再び石垣原合戦の様子を偲んだ。

休憩後、最後の見学地みゆき坂展望台公園へと少々歩き、吉弘嘉兵衛統幸陣所跡、皇太子行啓記念碑を見学した。陣所跡はまさに戦略的に優れた場所であることを実感でき、石垣原合戦の時観海寺から堀田の地に大友方が布陣した理由も理解した。

観海寺・堀田地区は、三六〇度の眺望とまではいきませんが、南東側から北西側まで見下ろせる地で別府市内は勿論大分市、別府湾、日出町、杵築市から国東半島までの景観を手に入れることのできる地区であることを実感でき、半日の史跡探訪を終えた。当日の資料を掲載します。

平成二三年度 別府史談会夏季現地学習資料

一、天満宮神社と天井画（南立石本町）

祭神は菅原道真。由緒書きには文明四年（一四七二）征夷大將軍足利義政御再興とあるが、村誌には明暦三年（一六五七）勧請とある。神社には「石垣原合戦の図」天井画三三枚が展示されている。原画は元陸軍日出生台演習場看守横田穰少佐作で、石垣原演習場の看守村田恰少佐の解説付き。これを南立石在住の沼田岩夫氏が譲り受けて保存。後に本陣跡の古屋勝馬氏の発案で天井画として活用することとなり、県立緑ヶ丘高校教諭の指導のもと、県立芸短大生大江朱美、橋本昌子二氏が拡大模写して天井画となる。御神木樟は市指定保護樹、幹囲八メートル・樹高一八メートルある。

二、宗像掃部記念碑

元の墓所は「大友本陣跡」北西の道路沿いにあつて、「史跡宗像掃部墓 別府市指定有形文化財」と表示した標柱が建てられ、掃部の墓とされた五輪塔のほか一連の石殿などがあったが、天満宮境内の現位置に移され鎮座している。なお宗像陣屋跡は、高速道跨線橋あたりにあつたと推定される。

三、大友本陣跡

杉の井ホテル前を山の手に進むと、「天満神宮参道」「大友本陣之跡」などの案内板があり、さらに「石垣原古戦場 大友義統本陣跡」などの記念碑がある。この一帯が本陣跡で、上手西方には宗像掃部の陣屋跡が、また下手東方には吉弘統幸の陣屋跡があるが、この台地南側一帯は深い絶壁状の谷になって朝見川源流へと連なり、自然の要害を形成していた。

四、北白川宮成久親王殿下覽古碑・征路軍人記念塔不動尊・

庚申講碑

◎北白川宮成久親王殿下覽古碑

大正六年（一九一七）一〇月九日、北白川宮成久親王が南立石本村を訪問され、現記念碑建立の地あたりから石垣原古戦場を俯瞰された。この慶事を記念して、翌大正七年に記念碑が建立されたが、裏面にその時の情景が刻字されている。冒頭部分を、読み下し文で紹介する。

大分県速見郡石垣村南立石ニ一大老松有り。土人呼ビテ鐘懸之松ト為ス。何ユエナルヤ。昔ハ大友義統家業ヲ恢復セント欲シテ此ノ地ニ遷リ、遠近ノ舊臣ニ檄シテ之ヲ合ハス。黒田孝高來逼シ、石垣原ニテ迎工戦フ。此時ニ當リ、

大鐘ヲ此松ニ懸ケテ撃チ、以テ士氣ヲ勵マス。故ニ之ヲ名ヅク。大正六年十月九日北白川宮成久王殿下來ラレ松下ニ就キテ臨眺ス。（以下『別府史談』第二十号参照のこと）

◎征露軍人記念塔

北白川宮の覽古碑の東側に等身大の不動明王像が祀られている。銘に明治三十八年一月建設と記されていて、時まさに日露戦争の旅順陥落・水師営会見が行われ戦勝気分に沸いた時期である。発起人は少講義・大石源治郎と十八世大和尚・村上嶺洲。前者は道路を挟んだ南側に居住していた村人、後者は海雲寺の和尚と推定される。

なお、少講義とは、国民教化を任とする教導職の一職制である。建立当時は、日露戦勝と国家の繁栄を言祝ぐ仏像として崇拜されたのであろうが、現在は、災厄を祓う不動明王として地域の人々に信仰されている。

◎庚申塚

庚申（かのえさる）の日に眠らずに夜ごもりをして身を慎む習俗。眠ると人体に潜む三尸（さんし）の虫が天に昇り天帝にその人の罪を告げるといふ。庚申塔を建て庚申塚を築き、青面金剛（しょうめんこんごう）や帝釈天、三猿（見ざる、言わざる、聞かざる）を刻み安泰を祈る。路傍に築

かれることが多い。

五、井上邸鍍絵（下記文章は、井上家当主故井上友介氏の『別府史談』第二十一号記載文の抜粋です）

鍍絵は日本全国に散在していますが、その半数近くの七〇〇件が大分県にあると言われています。（中略）旧家の蔵や住宅の白壁に描かれた鶴・亀・龍・七福神・家紋などの鍍絵は別名漆喰彫刻、左官絵、鍍掛け、蔵飾りとも呼ばれ、無名の職人によって作られました。主な素材は石灰であること。これに海草や繊維状のスサなどを混ぜて浮彫のように盛り上げる。（中略）

この鍍絵は敗戦直後に作られた。当時四国の左官職人が住み込みにて作りあげました。亡き父が昭和三年生まれで干支が「辰」だったのでデザインが決まったとのこと。立体感を出すために龍を浮かせて飾っている所に他の鍍絵では見られない特徴があります。現在半世紀以上経っていますが何ら朽ち落ちることもなく、当時の左官職人の技術の高さを物語っています。

六、海雲寺

杉の井ホテル前の道を山の手へと上ると海雲寺がある。貝原益軒の『豊国紀行』に「立石村中に大友義統宿陣宅の

跡あり、広さ一段斗、また村中に宗像掃部の墓あり、この村に寺二あり」との一文がある。寺二の一角が当寺であるとされる。南立石本町にあり、曹洞宗で本尊は釈迦牟尼座像。縁起によると、応安三年（一三六八・南北朝時代）玉田和尚の開山。後大友親著が山林田畑を寄進したが慶長の大地震で倒壊、元和年間（江戸時代初期）に再建したとされるが、境内には十八世紀から十九世紀にかけての一字一石塔や供養塔が多く、九州四国三十三番札所となっている。本堂南側のカヤの大木は市指定の保護樹で、幹囲三・一五メートル、樹高十六メートルである。

なお、大友義統降伏の際、剃髪した寺院とも伝えられている。

七、杉の井地熱発電所

この地は、昭和二二年、工業技術庁による日本最初の地熱発電試験が行われた地熱発電発祥の地である。現発電所は昭和五六年二月に運転開始、出力3000KWで、ホテルの照明をはじめ、冷暖房・エレベーター・厨房アミューズメントなどに活用されている。

八、大石橋観海寺橋

杉の井ホテル南東側前の朝見川溪谷に架かる橋が石橋

観海寺橋である。長さ三三・五^{メートル}、幅五・五^{メートル}。大正十一年（一九二二）地元旅館が基金を出し合ったとも、また観海寺開発をめざす不動産業者が、県に二万五千円を寄付して架けたとも言われる。メガネ橋の形状をしたレンガ作りの優雅な橋であったが、現在はセメントで固めて興趣に乏しい。この橋は別府回遊道路の起点ともいえ、橋を渡り南の山際を辿るとケープブルラクテンチをへて別府市街地や別府湾の景観を一望しながら、浜脇までの周遊を楽しむことができる。

九、復興泉と観海寺温泉

後白河法皇の入浴伝説（薬師堂案内板）や観海寺の由来伝説などに見られるように古くから開けた観海寺温泉は、江戸時代に立石村が高一千石の大村として萩原三位兼従^よの領地になってから開発が進み、明治時代編纂の『速見郡村誌』によれば「浴場老ヶ所逆旅八戸、老歳中浴客大凡千五百人」とあり現薬師堂位置が浴場で、二階は浪曲や寄席などに使われていたという。しかし、昭和六年に起こった観海寺大火災で、観海寺温泉・旅館・巡査駐在所・住宅など十九戸が全焼し、後現在地（公民館一階）に復興泉として再興された。現在一般客の入湯は不可。温泉祭りの際

のみ公開されている。

十、薬師堂の建立

観海寺薬師堂については、確たる伝承に乏しいが、前項「観海寺温泉」の項と、昭和八年に、速見郡石垣村村長熊谷頼太郎により建立された「薬師堂記念碑」の一文により、その起源に思いを馳せて見たい。

「観海寺温泉場ノ大火ノ瞬時ニシテ、全戸ヲ焦土ト化シ、本堂ハ猛火ノ裡ニ在テ災火ヲ免ル、郷人奇蹟ニ驚嘆ス。這回靈域浄化ニ際シ、莊嚴ナル堂宇ノ建立ナル。

十一、観海禅寺の由来

観海寺縁起に「口碑に曰く、奈良時代養老二年（七一八）仁聞（にんもん）菩薩始て錫（しゃく）をこの地に留め、温泉を開き、諸処の病者をして入浴せしめ、（中略）一字を建立して観海寺と称す、当時自ら薬師如来の尊像を彫刻し本尊となす」とあり、六郷満山開基の仁聞菩薩を開祖としている。ただし年次は別にして仁聞菩薩は伝説上の人物とされている。

江戸時代の宝暦年間、さきの萩原兼従により再建されたが、明治維新の際廃寺となり、昭和十三年に再興された。現在は曹洞宗寺院。なお、境内には次の碑がある。

◎式子内親王墓所

鎌倉前期の歌人。後白河法皇の第三皇女、百人一首に和歌あり。後白河法皇伝記との関連か、当地で湯浴みし没したとの伝説がある。

「和歌」 玉の緒よ たえなば絶えね ながらへば
忍ぶることの よわりもどすれ

(『新古今和歌集』より)

◎特別攻撃隊憩翼碑

杉の井で最後の夜を送った特攻隊員の鎮魂碑。

◎征露軍人記念碑

日露戦勝記念碑で「日本全勝」等と記されている。

十二、吉弘嘉兵衛統幸陣所跡

杉の井ホテル群の東端、「みゆき坂展望台」公園一带は、石垣原合戦大友方右翼の吉弘統幸の陣所跡とされている。「大友本陣跡」同様、天然の要害に囲まれ、石垣原の原野と、豊前街道高崎山山麓の銭瓶峠を俯瞰できる戦略的に重要な位置を占めていた。

その他当日配布した資料を次に記載します。参考にして下さい。

